



2019年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 千鶴子, 古田, 和久, 土井, 智晴, 東田, 卓, 鯨坂, 誠之, 石丸, 裕士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017220

2019年度ティーチング・ポートフォリオ作成 ワークショップ開催報告

井上千鶴子*¹, 古田和久*², 土井智晴*³, 東田卓*⁴, 鯨坂誠之*⁵, 石丸裕士*⁶

Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2019

Chizuko INOUE*¹, Kazuhisa FURUTA*², Tomoharu DOI*³, Suguru HIGASHIDA*⁴,
Shigeyuki AJISAKA*⁵ and Hirohito ISHIMARU*⁶

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会として毎年2～3回のワークショップを開催し、教育改善の研究に取り組んでいる。2018年度の第21回に続き、2019年度にも小学校教員の参加があり、地域貢献としての広がりも見せつつある。本稿では、2019年度に開催した第22・23回のワークショップの概要について、ワークショップ参加者の報告による教育改善効果の考察と検証を報告する。

キーワード: ティーチング・ポートフォリオ, 教育改善, メンティー, メンター, スーパーバイザー

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略す）作成ワークショップ（以下、WSと略す）を開催した^[1]。以後本校TP研究会は年2回（2011年度は3回）のWSを開催し、TPWSによるより効果的な教育改善の研究に取り組んできた。2020年5月現在では、副校長を含めた常勤教員66名中51名（約77%）がTPを作成している^[2]。本稿では、2019年度に開催された第22回および第23回TP作成WSの概要について記した後、参加したメンティー及びメンターの感想と考察を記す。なおTPについての詳細、特徴等については既報^{[1][2]}ならびに書籍^{[3][4]}を参照されたい。

2. ワークショップの概要

参加した作成者（以下メンティー）と助言者（以下メンター）の人数は、表1の通りである。日程は、第22回

が2019年9月10日～12日、第23回が2019年12月25日～27日である。第22回、第23回ともアカデミック・ポートフォリオ（以下、APと略す）作成WSと、さらに第22回はスタッフ・ポートフォリオ（以下、SPと略す）作成WSとも同時開催で実施した。内容はオリエンテーションの後、数回のメンターとの個人面談（メンタリング）を交えながら作成し、一方WSを運営するメンターはメンターミーティングでメンタリングの進め方の報告と検討を行っている。簡単なスケジュールを表2に示す。メンターミーティングを統括するスーパーバイザーは、東京都立大学の加藤由香里氏（第22回）、東京大学の栗田佳代子氏（第23回）、福井工業高等専門学校の長水壽寛氏（第23回）にご担当いただいた。第22回には本校古田も担当した。

TPは高等教育機関を中心に広がっているが、初等・中等教育の教員でも作成することは可能である。2017年度に本校WSで高等学校教員の方がTPを作成された。小学校教員は2018年度を皮切りに、第23回でも1名の方が参加されてTPを作成されている。

なお本校のWSは、2013年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開したTPワークショップ基準を満たしている。

2020年9月15日受理

*1 総合工学システム学科 一般科目
(Dept. of Technological Systems : General Education)

*2 機械システムコース (Mechanical Systems Course)

*3 メカトロニクスコース (Mechatronics Course)

*4 環境物質化学コース (Environmental and Materials Chemistry Course)

*5 都市環境コース (Civil Engineering and Environment Course)

*6 奈良工業高等専門学校 (National Institute of Technology, Nara College)



図1 第22回オリエンテーション

表1 2019年度に開催したTP作成WSの概要

	メンティー	メンター
第22回	8名(うち学外5名)	8名(うち学外2名)
第23回	9名(うち学外9名)	9名(うち学外6名)

表2 TP作成WSのおもなスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前		個人メンタリング(2) TP作成作業	個人メンタリング(4) TP作成作業
午後	オリエンテーション 個人メンタリング(1) TP作成作業	個人メンタリング(3) TP作成作業	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 TP作成作業	TP作成作業	修了を祝う会

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して 教員としての自覚が芽生えた(安藤太一)

私は着任して半年が過ぎた夏に初めてメンティーとしてTPWSに参加した。私は本校出身で卒業後に非常勤講師も経験していた為、本校の教育理念や方針については十分理解しており、自身ではしっかりと教育を行えているつもりでいた。そんな中、本WSへのお誘いがあり、宿題があることや3日間拘束される事からあまり参加意欲は高くなかったが、先輩の教員の方々が皆参加している事を知り、何もわからないまま参加に踏み切った。

初めはTPを作成する意味も理解できておらず、全く筆が進まなかったが、メンターの奈良高専の石丸先生とのミーティングの中で自身の中に眠っていた教育理念に気が付き、少しずつ作業を進める事が出来た。

長い文章をたった3日間で完成させるのはかなり骨が折れる作業ではあったが、執筆を進めるにつれて、たくさんの気づきがあった。メンターとのミーティングでは、

自身の教育を見つめなおす機会があり、自分では気付いていなかった教育理念を発掘する事が出来た。また、本校の教育理念に対する自身の教育方法のズレやマッチしている点も発見する事が出来た。自身の過去受けてきた教育を教員の立場から改めて見直す事で今の自分の考えにどの様に影響を与えたかもわかった。

3日間のWSを終え、勿論大変ではあったが、得られたものは大きいと思う。いままでの授業の振り返りが出来ただけでなく、これから授業を行っていく上での軸となる、自身の教育理念が発掘出来た事はとても大きい。半分まだ学生気分です授業を行っていた自身にとって、このタイミングで教員の目線で教育活動を考える機会を得た事は非常に幸運だったように思う。WSに参加する前と比較すると、学生の教育的効果を考えて授業の組み立てを行うようになり、教員としての自覚も芽生えたように思う。

今後も数年おきにTPを更新し、自身の考えを教育活動にフィードバックしたいと思うし、メンターも経験し、色んな教員の視点に立って教育を見つめる事により、視野を広げて教育活動に尽力していきたい。

4. メンターを担当して メンターを経験して(土井智晴)

2019年9月10日~12日の3日間で夏のTPワークショップが開催された。夏のTPワークショップのメンターは久しぶりであった。今回は、大阪樟蔭女子大学のS先生のメンターを務めた。食べ物の栄養について専門に学ぶ大学の専攻で担当をされており、高度専門職の養成に主眼をおかれている学科に所属されている。私は、人間のように食べ物からエネルギーを得る動物ではない、電気で作動くロボットを研究対象としている分野で教育研究活動を行っているの、メンタリングで聞く専門的な内容は、とても新鮮な内容であった。

S先生は、学科の中でも指導的な立場にある教員で、かつ、大学初年次教育と高学年が学ぶ専門的な分野および卒業研究を指導されていた。そのため、様々な面から学生たちと接することで、ご自身の種々ある立場に、少し矛盾を感じ、悩まれているような印象を受けた。私自身も勤務校で良く似た境遇にいたので、共感する部分が多々あったが、高専の例を多く話しても、なかなか伝わらないと考え、メンターの鉄則である「とにかく、色々な事柄を聞く」に徹した。

その結果、メンティー自身が多くのことを語る過程で、組織内の同僚との協力に気づきがあり、学科教員との情報共有、学科の運営ということが、ご自身の教育のあり

方に大きく関与していることに気づかれたようである。

メンターをして、毎回次のように思うのである。人間は自らの経験を振り返り、他者に語ることで、過去の時点において自分自身では気づけなかった、当時の自分の判断や経験を客観的に見直すことができ、現在の自分の存在や継続して行われる行動を肯定できる力を得ることができると。そして、メンターを務めることで、その気づきの瞬間に居合わせることができる。このことは、とても、嬉しい経験になっている。本報告の読者でメンター未経験の方があれば、是非、メンターを経験されることをお勧めしたい。

TPのメンターを経験して（東田卓）

近年、TPメンターとして自らのメンタリングの取り組みを振り返る機会が2度ある。TPの最終稿を熟読している時と、この紀要を執筆しているときである。メンタリングの間は常に迷いが生じる。教員として学生に教育する際、「この教育法で良いのか」と振り返ると同様に、メンタリング方法がこれで良かったのかと自ら反省する。

教育と同様に個人メンタリングの現場では一期一会である。遠いところから来ていただき、2泊3日のメンターとの伴走生活でTPWSが無為に終わることが無いかだけはいつも心配している。この悩みはある程度これまでの経験とメンターミーティングでスーパーバイザーの意見と他のメンターの意見を伺う事で解決する。

今回のメンティーは近隣の公立大学法人の看護学科の先生であった。最初のメンタリングから、教育に対し大変熱心な取り組みをされていると感じることができた。ただ、なかなか方法は顕在化できても、「理念」は出てこない。数回のメンタリング後、顕在化されたのは「背景を流れる信念」、「この信念に裏打ちされた2つの理念」、「さらにその下に流れる下位概念」であった。看護系学校における教育のmustは「国家試験に合格」することである。さらに看護技術を持つこと、そしてもう一つの理念である個人に応じた“らしさ”を持つことであった。スタートアップにあった内容から大いに変わり、非常にシンプルでわかりやすい構成にまとまった。カバーページもわかりやすく、素晴らしいプレゼンテーションをしていただいた。

毎回の「メンタリングがこれで良かったか」どうかの振り返りはこれからも永遠に続くと思われるが、この2回の振り返りにより、今回も概ね良かったのではとほっと胸を撫で下ろす。唯一残念なことは、目標に「TPWSを現職場に持ち込みたい」と言う目標が導入されなかった事である。教育もメンタリングも一期一会、常に改善する必要がある。今後も現状に甘えることの無いよう、毎回・毎回初心を忘れることの無いよう、これからもメン

ターとしてのモチベーションを保ち続けたい。

TPメンターの役割を果たせたのか？（石丸裕士）

これまで、ベテランの高専教員・着任間もない高専教員・他校種の先生方など6人のメンティーのTPメンターを担当してきた。おかげで、スタートアップシートを拝見し、インテーク面接でTP作成の理由や教育で大切になさっておられる話を伺えば、その方に合ったTP作成スケジュールの概要を提示できるようになってきていた。メンターミーティングの使い方にも慣れてきていたので、そのスケジュール感の許す範囲で、TP作成の目的を達成するために深掘りすべきポイントを厳選して面談を繰り返せば、メンティー本人はもちろん、メンターである私も満足感の得られるTPが完成出来ると信じていた。

今回担当したメンティーは、教員歴の浅い先生ではあるものの、高専出身者で高専をよくご存じの方で、「新任として今後の教育活動の方針を定めるためにTP作成したい」との希望を持っておられた。2時間足らずでスタートアップシートをおまとめになっておられたわりには大変よく整理されており、面談で教育理念に関することを伺っても理路整然とご回答なされたので、私のメンター史上最速で何の問題もなくTP作成は進んでいった。このことを素晴らしいと感じた反面、少し違和感もあった。これまで担当したメンティーの方々は、職場からの要請から受動的にTP作成なされた方、TP作成意欲は高いものの面談の度に理念が揺らぐ方、訳あって3日間TP作成に集中できない方など、タイトなスケジュールとなる方がほとんどであった。しかし、時間の許す範囲で、教育で大切になさっていることやその理由などについて深掘りした結果、毎回、メンティーご本人も強く意識されていなかった教育理念や教育的なこだわりが浮き彫りとなり、その後の教育活動の目標設定に役立つであろうTPに仕上がっていった実感があった。今回は面談を終えるたび、「全く深掘りできていない。今後の教育活動方針を定めるためのきっかけになるようなTPとなるのだろうか？私はTPメンターの役割を果たしているのだろうか？」という思いと、「TPは1回書いたら終わりじゃないし、今回は点検したけど問題は見つかりませんでしたというTPがあってもいいのでは？」という思いが交錯した。この思いをメンターミーティングにぶつけたところ、概ね後者を支持していただいたこともあり、何とか自分を納得させて面談を終えた。今回のメンタリングが、メンティーの目標設定に役立っていればいいのだが。

実務経験者のTP（井上千鶴子）

2019年度は、2名のメンティーを担当した。どちらも

大学教員の方が、資格取得や就職後の実務を強く意識する学部に所属し、ご自身も実務経験が豊かにあるということが共通していた。実は他学のWSでも、実務家教員の方を担当することが増えている。このような先生が増えているのは偶然ではなく、文部科学省の高等教育の修学支援新制度（2020年度開始）において、対象教育機関の要件に「学問追究と実践的教育のバランスが取れた大学」「実務経験のある教員等による授業」^[5]が挙げられていることと関係なしとしないため、この傾向は今後も続くと思われる。

実務家教員の方は、実社会で卒業生が働く現場を熟知しておられるので、「こんな学生を育てたい」という学生像は極めて具体的なことが多い。「こういうことでは～で困るので、～できるようにしてあげたい」と、明確に述べられる。そして、経験に裏打ちされた生々しい教材を用いて個性的な教育をしておられる先生も多い。しかし逆に、教壇年数が短いため、「大学の先生」としては経験が浅いことを不安に思われることもあるようだ（もちろん、自信を持って教えておられる先生も多数ある）。

企業の研究職から転身されたある先生は、「だって、少し前までサラリーマンだったんですよ」と困ったように何度も仰った。確かに、私の周囲の（WS常連の？）教員と較べると、穏やかで失礼ながら少し大人しそうな第一印象だった。しかし、お話を聞いていくと、自ら望んで教育の世界に飛び込んでこられたことや、何より業界に貢献する誇り、現場を知っているからこそ学生に伝えたいことをたくさん持っておられることが分かってきた。TPは、そのような先生の熱い理念を明確にし、現在の教育方法がどのようにその理念につながっているかを説明するものとなった。最初は、漠然と「先生としては初心者だから、教え方が上手でないのではないか」と思っておられたのが、「こういうことを学生に伝えたいので、～をする授業を開発したい」と変わっていった。

メンタリングの最初はいつも、「TPを何のために作成しますか」と作成目的をお伺いする。TPの解説書では「自分の教育の振り返り」と紹介されることも多い。振り返りと言っても掘り所が無いが、自分は何がしくて、自分の授業はそれが出来ているのか、を点検していくと、具体的に見直しができ、次に何をすべきかが具体的に見えてくる。TPの有効な使い方だと思う。特に、教育界の外から入って来られた先生は、「自分は教育歴が少ないからTPを書きにくいのではないか」と思われるかも知れないが、そんな先生にもTPはお役に立てるツールであると思う。

カメラを通して見たTP（鯉坂誠之）

私はこれまでのTPWSにおいてメンター経験をさせて頂

いた際に、事務的な役割としてカメラマンを同時に担ってきた。2019年冬のTPWSでも、カメラを片手にWSの全体風景を切り取りながらメンターとしての役割も全うした。今回はカメラを手にするメンターとして、そのカメラを通して見たTPの世界を振り返ってみようと思う。

私の撮影は、WS会場でみなさんと自己紹介をしあうシーンからスタートする。私自身の自己紹介の決まり文句は「…なお、このWS期間中はカメラマンとして写真撮影をさせていただきます。」であり、写りたくない方はお申しつけください、といった趣旨を伝える言葉で結ばれる。撮影されていることが気になって、TP作成に支障が出ては困るので、最初のうちは遠景や全体風景を撮るように心がけている。それでも、カメラのシャッター音に敏感に反応される方もいる。少し懐疑的な視線を感じる。そんなときは会場の設備や備品（プリンターの設置状況やお茶菓子の準備状況など）を記録することにして、1～2枚、さらっと撮影して会場を去る。

メンターミーティングの様子も撮影する。何度もメンターとして参加されている方もいれば、初めてメンターに挑戦される方もいる。場を和ませようと笑顔でお話されている方もいれば、間もなく始まるメンターミーティングに向けてメモを整理されている方もいる。私自身もメンターとして参加しているため、メンター&メンティーによる個人ミーティングの際には、一旦、カメラマンとしての役割はお休み。しっかりとメンタリングを行った後に、再びカメラマンとして全体の様子を見に行く。二日目のお昼には、参加者全員が集まってお弁当。少し、みんなの表情も緩んできている。お昼は休憩時間でもあるけれど、TPWSにおいては、いろんな方とお話ができる貴重な時間。そこにある不安な気持ちと苦笑いを写真に収めた後、午後の作業に向かっていく。二日目の午後は、風景写真の中でも頭に手を当てている人が心なしか多い。そして迎える三日目のプレゼンテーション。ギリギリまで悩んだ人ほど、発表の時の表情は晴れやかな気がする。吹っ切れたとでも言うべきか。一人ひとりが自分のTPを説明し、修了証が授与された後に、記念の集合写真を撮影する。カメラマンとしてはこの瞬間が、最も嬉しい。初日にはシャッター音を気にしていた人も、今はもう笑顔である。誰一人として、懐疑的な視線を送る者はいないのである。

私はカメラを通して、そんな状況も楽しみながらメンターをしている。

5. スーパーバイザーを担当して

スーパーバイザーを経験して（古田和久）

第22回TPWSにおいて、初めてスーパーバイザー（以下、SVと略す）を担当させて頂いた。これまでに、TPの

メンターを4回、APのメンターを1回務めさせて頂き、そろそろSVをしてはいかがですかと勧められ、引き受けることとなった。

今回は、5名のメンターで構成されるグループのSVを務めることになった。5名ともメンター経験が私よりも豊富で、初めてのSVの私にとっては非常に心強い存在であった。SVは、準備段階としてメンターと同じく、メンティーのスタートアップシートを読み込むのであるが、やはり5名分は多く感じた。また、第1回目のメンターミーティング（以下、MTGと略す）において共有できそうな情報、たとえばスタートアップシートには載っていないが、所属機関のウェブサイトに掲載されている情報等を調査する作業も苦勞した。SVのWSへの準備は、メンターの仕事を単純に5倍しただけではないことを痛感した。

第1回MTGの直前も、スタートアップシートの読み落としが無いかが気がかりで、初めてメンターを担当したときと同じ位に緊張した。SVはMTGの司会進行し、メンターからメンティーの状況を伺い、それに対して助言、コメントをし、さらに他のメンターと情報を共有する役割がある。MTGにて各メンターから挙がってくるメンティーの状況整理、メンタリングとTPを作成する上での今後の方針の議論において、自分が気づけなかった点も多く、力量不足を感じるが多かった。また、深夜に5名のメンティーから送られてくるTPへのコメントも大変であった。

栗田氏によると、SVはメンターが「MTGに帰ってくる」とほっとするような場を提供する“酒場の女将”的な役割も果たす必要があると述べている^[3]。できる限りそのような場づくりを心掛けようとはしたものの、本当にそのような場をつくるのができたのかはいまだに疑問である。今回のWSは、自分がメンティーでTPを作成したときよりも長く感じた3日間であった。しかしWSを通じて、メンターを経由してではあるが、5名のメンティーの貴重な教育の理念や方法を知ることができ、メンターに比べて5倍以上の収穫があったことは良い経験となった。このWSにおいて初めてのSVを無事にやり遂げることができたのは、メンターの支えがあつてのことであり、各メンターにこの場を借りて御礼申し上げる。次の機会があれば、より懐の深い「女将」になれるよう努力したい。

6. おわりに

以上、1名のメンティー、5名のメンター、1名のスーパーバイザーの報告と考察を掲載した。

初めてTPを作成する人は、普段書いている論文とは異なり、しかも三日間もある研修で何をするのだろうと不安を持ちながら参加されると思うが、実はメンターも

様々な不安を感じている。メンティーに対する責任を考えると、そのプレッシャーはメンティー以上かもしれない。今回も、「このアドバイスで良かったのだろうか」という迷いが途中にあったことを、複数のメンターが吐露している。そうした場合、WSではメンターミーティングで課題が報告され、スーパーバイザーや他のメンターの意見も交えて多角的に検討する。メンティーが特に困難な課題を抱えていると思われる時は、休憩時間にスーパーバイザーがそれとなく話しかけたり、時には昼食時にある意見交換会で話題にすることで糸口を探ることもある。古田も書いているように、WSはメンターも孤立させないように設計されている。

メンターの悩みは、自分の担当したメンティーのTPが、自分の経験した他のTPと少し違うかもしれないと思った時に生じるようだが、TPがメンティーの教育を記述するものである以上、メンティーの数だけTPの種類はある。そして、TPは間違いなくメンティーのものだ。TPの目的は教育改善であるから、できあがったTP（成果）を競うものではなく、作成（プロセス）が今後のメンティーに有意義であることが何より大切である。メンティーが納得していること、TP作成がメンティーの糧となったと感じられていることが一番優先される。

TPが日本に紹介されてから10年以上がたち、関連書も増えている。これからTPを作成する人たちがTPを知るための書籍は充実しつつあるが、これからメンターをしようという人が参考にできるものは、比較的少ない。本稿及び既報がメンター経験者の報告をこれだけ収録していることは、特筆してよいと考える。2020年3月に全国組織としての「ティーチング・ポートフォリオ研究会」も発足し、発起人には本校北野健一も名を連ねている。今後もTPは普及の一途を辿ると思われる。本稿がこれからTPを作成する諸氏及びTPWSの実施を考慮しておられる教育機関の参考になれば幸いである。

謝辞

本研究は [JSPS 科研費 17K01001, 20K12094](#) の助成を受けたものです。



図2 第22回修了式



図3 第23回 修了式

[1] 北野ほか：日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府立高専研究紀要，第43巻，pp. 63-70(2009)．

[2] 北野ほか：第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告，大阪府立高専研究紀要，第44巻，pp. 57-64(2010)．以降第53巻まで毎年報告を掲載している

[3] 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著，実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック～実質的な教育改善活動を目指して～，NTS出版(2011)．

[4] ピーター・セルディン著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「大学教育を変える教育業績記録」，玉川大学出版部(2007)．

[5] 文部科学省，「高等教育無償化の制度の具体化に向けた方針の概要」(平成30年12月28日)，「(高等教育の修学支援新制度) 機関要件の確認事務に関する指針(2020年度版)」(令和2年3月31日) など